

つながる、かがやく、ひびく おもちゃエンパワメント

多田千尋 (東京おもちゃ美術館 館長)

30年の歴史を誇る東京おもちゃ美術館は、美術教育の専門家で初代の館長であった父が創設したもので、遊ぶ、創る、鑑賞する、の三つの柱で運営する。「人間が初めて出会うアートは、おもちゃではないか」という考えの下、私たちの施設は「博物館」ではなく「美術館」となった。5年前に、東京の中心地の廃校となった小学校に当館は移転し、入館者規模や活動内容が10倍に膨れ上がり、現在、年間12万人余の入館者を数える。ミュージアムは、赤ちゃんも楽しめ、老人も手ごたえを感じることができる多世代交流ミュージアムを目指している。

本ワークショップでは子どもの遊びとおもちゃとの関係性にスポットを当て、子どもにとっての遊びの意義、子どもの発達にとっていかにおもちゃが大切かといった諸問題に迫りたい。

おもちゃの子どもへのアプローチとしては、第1としておもちゃの持つコミュニケーションを活性化させる力にスポットを当てる。コミュニケーションを豊かにする数々のおもちゃを紹介しながら、子ども間や家族、さらには祖父母と孫の会話の潤滑油の役割を果たすことに考察を加えていきたい。

第2として、手・指の運動機能の活性といった力に注目したい。幼児段階になると子どもたちの手の運動を促すアクティビティ玩具が主役となる。伝統的な独楽遊びから、現代的な科学おもちゃなどが子どもたちの手と指をフル稼働させるために待ち受ける。

感性から運動、さらにはコミュニケーションに至るまで、おもちゃを媒介にした多角的なアプローチを試みることによって、今、失われようとしている「感じる力」と「表現する力」を育てることに主眼を置き、その両者の力がひいては人との繋がりや絆、さらには人との係わり力を豊かにする社会を産むベースになるものと確信する。

さらに、おもちゃと「木育」の関係性にも触れたい。子どもたちの集中力を高める木目という天然デザイン。樹木の香りによって子どもたちや親の心地良さを醸し出すアロマ効果。触り心地に多様性を感じさせる木肌。そして、おもちゃになっても生き続ける、木の持つ生命と子どもたちに与えるスピリチュアリティ。このような様々な力が発育には必要ではないかと考えている。

—プロフィール—

多田千尋 (ただ・ちひろ)

東京おもちゃ美術館館長、芸術教育研究所所長、早稲田大学・お茶の水女子大学非常勤講師。1961年東京都生まれ。明治大学法学部卒業。乳幼児から高齢者までの遊び・芸術によるアクティビティケア及び世代間交流の実践・研究に取り組むほか、20年にわたり、おもちゃコンサルタント5000人の養成と、高齢者・障害者福祉施設におけるQOLの向上を目指す「アクティビティディレクター」を全国に500名養成している。著書に『遊びが育てる世代間交流』（黎明書房）、『絵で見るふるさとの伝統探し こどもの世界と遊び』（学習研究社）、『おもちゃのフィールドノート』（中央法規出版）など多数。

